

# フランシス・ベイコンと改革の精神

下野 葉月

フランシス・ベイコン(1561-1626)は、デカルトと並んで西欧における近代の幕開けを象徴する思想家である。『フランシス・ベイコンと近代 (*Francis Bacon and Modernity*)』を記したチャールズ・ウィットニーは、近代という時代を以下のように分析する。近代という時代はルネサンスに始まった歴史の時代を指すが、「近代的 modern」という言葉は相対的なもので、それは単純に昔と差別化される今を指し、現在の状況と過去の状況の違いの認識をあらわにする、と<sup>(1)</sup>。ベイコンはまさに過去との決別を意識して、それまで学問的領域においてなされてきた慣わしや不毛な伝統を立ち去り、知的領域における「革新」を起こそうと企てる。ウィットニーも指摘するように、ベイコンの著作の多くは何かしら革新的なことを実践するようにはたらきかける。『学問の進歩 (*Advancement of Learning*)』ではあらゆる時代の知識が網羅され、いかに知が進歩するか、そしてどのような知の領域が未開拓であるかが開示されている。『ノヴム・オルガヌム (*Novum Organum*)』においては、当時の思想潮流が否定され、新たな発見の哲学と方法が示される。これらの著作の中でベイコンが強調するのは、彼が今までに構想されたことがない全く新たな事業を立ち上げているということであり、ここに彼の「近代的」な歴史的自己認識を見出すことができる<sup>(2)</sup>。しかし、ウィットニーの考えでは、ベイコンは完全に「近代的」ではない。なぜならベイコンの未来に向けた変革への呼びかけは、当時流行していた聖書を由来とする「予言」の言葉に依拠したものであるからだ。ベイコンの主著『大革新 (*Instauratio Magna*)』(1620)において使われている *instauratio* という語は、旧約聖書に登場するソロモン宮殿の再建を指す言葉であり、ベイコンはこの語をあえて用いることによって、人間の救済を最終目的とした知の立て直しと完成を目指していることを効果的に印象づけた。新たに來るべき時代の到来を太古の文書に依拠しながら語るベイコンには、このような「非連続性」があり、ウィットニーはそれこそが近代の特徴なのだという<sup>(3)</sup>。

確かにベイコンは人間の知的領域における革新が必然的に為されねばならないかのように、あたかも予言書に書かれていた決定事項であるかのように語る。しかし、なぜベイコンという人物はここまで知の領域における「革新」にこだわったのだろうか。この問いに答えるために、本稿ではベイコンが知的改革を構想するに至った背景となる当時の時代状況、及び彼の出自や生き立ちをベイコンの伝記をもとに分析し、いかにして「改革」への関心が醸成されたのかを考察する。主に参照した伝記は、リサ・ジャルダンとアラン・スチュアートによる *Hostage to Fortune: The Troubled Life of Francis Bacon* (1998)である<sup>(4)</sup>。同時に James Spedding によるベイコン全集 *The Works of Francis Bacon*<sup>(5)</sup>に収められた *The Letters and the Life* も参照したが、この全集が編纂された19世紀以降、マニユスクリプトの研究が進み、収められた作品や手紙の著者が現在は訂正されている場合もあるため、二次的にのみ参照した。その他にもベイコンの人生について語ったとされる作品は存在するが、小説に分類されるような作品は参照していない<sup>(6)</sup>。

本稿の中でとりわけ重点が置かれるのは、バイコンと宗教改革の関係である。彼が生きた 16 世紀後半、宗教改革は未だに不完全な形でしか実現されておらず、カトリックとプロテスタントの間に生じていた争いは激しさを増し、イングランドでは国教会と清教徒の間でも抗争が繰り広げられていた。そのような世界に生きたバイコンは何を考え、どのような行動に出たのだろうか。これを探りたい。

## 1. 改革への訴え——『大革新』

まずバイコンがいかに知の改革を求めたのか、彼の著作『大革新』の冒頭におさめられた《著者の声明》及び序の言葉を例として、見てみることにしよう。バイコンが改革を求めるのは、主に〈人間による事物の認識の仕方〉である。彼曰く「人間が自然を探求する際に用いている理論はうまく集約され作り上げられておらず、いわばしっかりとした基礎のない、巨大な山積みである」<sup>(7)</sup>。自然探求の方法に基礎となる土台がなく、散漫としている状態はバイコンにとって許し難いものであった。そのため「革新」が起こされねばならない。

それゆえ、つぎのただ一つのこと—すなわち、仕事をいっそう良い方策によってはじめからやり直し、そして正しい基礎から築き上げて、学知と技術と人間のあらゆる教えの全般的革新を行うこと—以外に道はなかったのである。<sup>(8)</sup>

バイコンの求めた人間の総合的な知の革新は、まるで必然に迫られたものであるかのように提示されている。多分にスケールの大きな知の革新を求めるにあたり、バイコンは読み手に対して、彼の改革のビジョンを荒唐無稽な妄想としてではなく、現実味を帯びた歴とした事業として認識するよう、苦心して訴える。さらに、賛同した読み手が積極的に知の革新に携わるようにも呼びかける。

自分自身の便益に対して公正に振る舞い、私見の執意と偏見を除き去り、共通の利益を一緒に考えていただきたい。そして私の保護と援助によって、迷路と障害を免れ安全になったのちは、なおこれから為さねばならぬ仕事に、自分自身も参加していただきたい。<sup>(9)</sup>

バイコンは改革には困難が立ちほだかることを見越し、将来この革新がうまく運ぶように読み手を勇気づけ、更にはこの事業が現世のみに還元されるものではないとする。

希望をいだいて、この私の「革新」を何か無限で超人的な仕事だと想像し思い為さないようにしていただきたい。それは実は、無限の誤りの正しい終極と限界であるからである。しかし、可死性と人間性との条件を忘れてはならない。この事業は、人間一代の経過のうちに全く完成されると信じてはならず、次の時代に委ねられなければならない。<sup>(10)</sup>

バイコンは自らが提示する革新を成し遂げるのは、自分でも彼の生きている時代の人間でもなく、将来の人類であると想定し、未来への展望を広げることによって革新のスケールを大きく拡大させる。彼によれば、この「大革新」が為されない限り、人間による事物の認識の仕方は暗闇に閉ざさ

れたままであり、この「大革新」を実行すること「ただそれのみが人間の精神に開かれている道」なのだ<sup>(11)</sup>。ウィットニーが指摘したように、ベイコンはこうした変革を〈為されねばならない必然〉あるいは〈神による定め〉として語り、自らの提案を「予言」の言葉で表現した。

## 2. 改革を希求するまでの道のり

### A) 改革の素地

フランシス・ベイコンという人物は、なぜここまでして学問や人間の知の領域における革新を唱えたのだろうか。人間による事物の認識は本当にそこまでの問題を抱えていたのだろうか。彼は上記以外にも知の領域における様々な改革を提示する。実際のところ、上記のような語り口は彼の思想の特色であるため、彼が求める革新や改革の源泉を探ることは、彼の思想形成そのものを明らかにすることと同義となるであろう。

フランシスが改革を訴えるようになった理由の一つとして考えられるのは、彼が青年期に自身の職業や生業を模索してゆく中で、自らの教養の高さや恵まれた境遇を考慮し、それに見合った壮大な事業の構想を編み出したというものだ。フランシスは20代をほぼグレイズ法曹院で過ごし、法律（コモン・ロー）の専門家としてキャリアを築いていった。大法官という要職に就いていた父ニコラス・ベイコンの息子として生まれていながらも、7人の子供の中で最も若く、父が亡くなる前に領土など収入源となる遺産相続の手配がなされていなかったため、フランシスには不労収入を得る選択肢が残されていなかった。そのため彼は法曹院に居を構え、法曹院の役職に努力して就き、同時に母方の叔父を頼りに、宮廷（政府）に関わる仕事を求めていった。16世紀後半のエリザベス女王の時代、つまりフランシスの20、30代は不遇の時代であったと言われている。なぜならフランシスは議会で議席を得て発言したり、個別の委員会に召集されたりはしたものの、女王からは嫌厭されていたからだ。そのような中でフランシスは母アン（Anne）の妹の結婚相手であり、宮廷人として国務長官になった叔父のバーグリー卿(Lord Burghley, William Cecil)を頼り、宮廷での出世を望んでいた。しかし、1592年1月、31歳になった彼がバーグリー卿に宛てた手紙には、いつものように叔父の引き立てを請いながらも、彼が異なる野心を持ち始めていることが鮮明に記されている。

私も今いくらか年をとりました。31年とは砂時計ではかなりの砂となります。(中略) 私は公務の目的と同じくらい、広大な観想の目的があると宣言します。なぜなら、私は全ての知識を自らの領分とするからです。(for I have taken all knowledge to be my province.) そこで私が2種類の放埒(rovers)を退治することができるとしたら、きっと生産的な観察や根拠のある結論、そして利益を生む発明や発見を引き出すことになるでしょう。その二つの放埒の一つ目はくだらない議論、論駁、そして言葉の多さであり、もう一つは盲目に行われる実験、そして口伝の伝統や詐欺ですが、それらは非常に多くの不良品を生み出してきたのです。(中略) これは私の精神に非常にしっかりと打ち付けられており、それを排除することはできないほどです。<sup>(12)</sup>

フランシスは法律家としての研鑽を積みながらも、同時に自らの哲学を築き、人間の知力を伸ばすために何がなされねばならないかについて考えを巡らせ、それを生涯の事業としようと画策してい

たようである。

## B) 教育のバックボーン

「全ての知識を自らの領分とする」と宣言していたフランシスは、いわば「お勉強好き」の人物であったし、そうなるべくして豊かな教育を受けていた。彼が受けたエリート教育は、イングランド国政の要職に就いていた父のはからいによるものであった。フランシス・ベイコンの父ニコラスはヘンリー8世の時代に大法官という役職に就いたイングランド宮廷の重鎮であった。ベン・ジョンソンが彼をキケローに喩えたというほど、父ニコラスは弁論において一定の評価を得ていた人物であった<sup>(13)</sup>。フランシスは12歳の時に兄アンソニーと共にケンブリッジ大学のトリニティー・カレッジに入学する。その時の住居や生活、学習の世話を任されたのは、**Master of Trinity** のジョン・ウィットギフトであった。彼がベイコン兄弟に買い与えたのはリウィウスの『ローマ建国史』、カエサルスの『内乱記』、デモステネスの弁論集、ホメロスの『イーリアス』、そして弁論術の古典『ヘレンニウス修辞書』等で、のちにアリストテレスやプラトン、キケローの全集、ガイウス・サルスティウス・クリプスの『歴史』、クセノポンのギリシャ語・ラテン語対訳なども与えられた。ギリシャ語の文法書、およびラテン語の聖書も与えられた。ウィットギフトは、父ニコラス・ベイコン卿が望むレベルの人文主義教育を施すのに十分なギリシャ語及びラテン語の素養があり、彼が選んだ本は、ベイコン兄弟に予定されていたジェントルマンとしての生活に適したものであった<sup>(14)</sup>。当時エリート教育と目されていたものと人文主義教育は表裏一体であり、その人文主義と宗教改革は切っても切れない深い因縁がある。フランシス・ベイコンは、イングランドを代表するエリート教育と人文主義及び宗教改革が織りなす豊かな土壌の中で育てられたと言えるだろう。ベイコン兄弟のケンブリッジでの生活は3年ほど(1573~1576年)で、2度ほど周辺で起きた伝染病のため中断させられている。

その後1576年にフランシスと兄アンソニーはグレイズ法曹院に入学が許可される。この時も財務担当を務めていた父ニコラスの威光により、**societas magistrorum (the society of masters, あるいは the grand company)**に迎えられ、いわば特別待遇を受けることとなる。グレイズ法曹院にはベイコン家の子供たちのための部屋があり、彼らは法曹院の正式な教育プログラムに従うことなく、自由に出入りすることが許されていた<sup>(15)</sup>。フランシスも入学するやいなや駐仏大使のアミアス・ポレーと共にフランスへ渡航し、外交及び政治の実務経験を積むことになる。同時にベイコンは、フランスにおいて世界と己を見つめる機会を得る。彼のフランス行きについては、後述する。

## C) 母アンの影響

父ニコラスの意向だけでフランシス・ベイコンの教育方針が定まったとは言い難い。無視できないのは、母アン(1527-1610)の影響である。母アンは当時の女性にしては珍しく、母国語の英語以外にイタリア語、フランス語、そしてラテン語、ギリシャ語に精通した才女であった。アンの父、アンソニー・クックはヘンリー8世の息子、エドワード王子(1537-1553)の家庭教師を務めた人物であり、そのためアンは宮廷のロイヤル・ファミリーと親しくしながら育った。アンの父は、同時代の人文学者トマス・モアと同じように5人の娘たちの人文主義教育に誇りをもっていた。彼女らの有徳のイメージを形成するために、ラテン語よりもギリシャ語に重きが置かれ、何よりも新約聖書の

ギリシャ語やギリシャ教父の教えに重きが置かれていた<sup>(16)</sup>。彼女が受けた人文教育はキリスト教をより深く理解するためのものだった。

母アンはフランシス・ベイコンという人物を考慮する上で多大な影響を与えた人物であるが、「彼女がもたらした最も重大な影響は、彼女の家柄でもなく、人文主義的な聡明さでもなく、彼女に深く根付いたプロテスタントの信仰である」とフランシスの伝記には綴られている<sup>(17)</sup>。確かに、アンが2人の息子に向けて書いた手紙には、英語に紛れて時折ギリシャ語の文章が暗号のように挿入され、キリスト教徒として神に恥じることはないよう、また敬虔であり続けるようにと頻繁に助言がなされている。彼女がキリスト教、とりわけ改革派のキリスト教と親密な関係をもっていたことは、彼女が関わった仕事に如実に表れている。第一にそれは宗教改革に携わった聖職者による書物の翻訳である。彼女が受けた人文主義教育とそれによって培われた語学力は、宗教改革を彼女自身が推し進める原動力となっていた。

アンはニコラスと結婚する前にベルナディーノ・オキーノ(Bernadino Ochino, 1487-1564)の著作を英訳し出版していた。オキーノはもともとフランシスコ会の修道士であったが、中年になってから新たに設立されたカプチン会に入り、その後アルプスを渡ってジュネーブのジャン・カルヴァンに迎えられ、プロテスタントに改宗したことで知られている。彼の改宗について綴られた『説教(Prediche)』という著作こそ、アン・ベイコンが英訳した本であった。オキーノはアウグスブルグのイタリア人プロテスタント教会の牧師となっていたが、亡命を余儀なくされイングランドに逃れ、カンタベリー大聖堂の主教座聖堂名誉参事会員として迎えられていた。彼は、エドワード6世が王位に就いた1547年に国教会の改革を進めるために、プロテスタント改革者によって大陸から招聘されていた。この時期にアンはオキーノと面識を得たのだと思われる。しかし、1553年にカトリックのメアリ1世が王位に就くと、オキーノはバーゼルへと逃れて行く。同時に500名以上のプロテスタントが迫害を恐れてイングランドを逃れ、大陸へと渡った。アンは家族、クック家の人々もメアリ1世の時代は迫害を恐れてジュネーブに亡命していた<sup>(18)</sup>。

アンは1553年にニコラス・ベイコンと結婚し、2人の息子に恵まれる。彼女は次男のフランシスが幼児の頃、ジョン・ジュウェル(John Jewel, 1522-1571)による『英国国教会の弁明(Apology in Defence of the Church of England)』をラテン語から英語に翻訳した<sup>(19)</sup>。これはエリザベス女王が即位した際、イングランド国教会の確立に重要な役割を果たした著作である。1562年に刊行されたこの著作の大義は、イングランド国教会の信仰を確立させ、ローマカトリックからプロテスタントへ向けられた抗議に対して応えるというものであった。国教会の正当性だけでなく宗教改革そのものの妥当性をも訴え、改革者と聖書、そして教父たちの連続性を唱えている。

アン・ベイコンは国教会の柱となるような著作をラテン語から英語に翻訳し、国教会を国民にとってわかりやすいものとしたが、彼女自身の心情としては国教会という国の宗教組織としての教会というよりも、プロテスタントの精神に根ざした開かれた教会—権威主義に陥らずキリストを囲む使徒たちの集まりのような教会、神の言葉を伝える教会—を理想としていた。エリザベス女王の即位後、国教会が制度として国民に強制されるようになると、国教会という体制側と霊的な教会を求める清教徒が対立するようになり、国教会が規定した服装やしきたりに従わない聖職者らは非国教徒(non-conformist)として弾圧されるようになる。この非国教徒の弾圧やそれに続いたパンフレット論争は、カトリックとプロテスタントの間で行われた宗教戦争に上塗りされることになったイン

グランド特有の宗教的争いである。

アン・ベイコンは自らが支持していた非国教徒の聖職者を保護するために、署名活動や政府要人に働きかけるといえばロビー活動に従事した<sup>(20)</sup>。またアンはニコラスとの結婚生活の間も、夫の死後も、ゴランベリーの自宅や近隣の教区に極めて清教徒よりの牧師を呼び込んだ。ベイコン家のチャプレンとして雇われたトマス・ファウル、ロバート・ジョンソンは国教会に従わないという理由で説教の資格を剥奪された者たちであった<sup>(21)</sup>。アンは公に非国教徒の説教を聴きに行っていたし、フランシスも同様に法曹院が定めたチャプレンの説教ではなく、母親と共に非国教徒のウォルター・トラバースの説教をテンプル寺院に聴きに行っていた<sup>(22)</sup>。彼女の清教徒としてのアイデンティティ、つまり国教会という権威に服することなく、自らの信念を通して宗教改革の理念を守りぬこうとする強い精神の影響で、アンソニーもフランシスも、大陸のプロテスタンティズムを模範とした改革派としての精神的な土台を築くことになった。改革に傾倒したプロテスタントとしてのアイデンティティは、大陸へと渡るとより一層磨き上げられ、ベイコン兄弟両者にとって重大な役割を果たすことになる。

### 3. 宗教改革との関わり

1576年、ベイコン兄弟は駐仏大使アミアス・ボレーに同行してフランスを訪れ3年間ほど滞在することになる。フランシス・ベイコンがフランスに送られた主な理由は、入学許可されていたグレイズ法曹院で学ぶコモン・ローの習得が視野の狭いものになってしまうため、フランスで実際に使われているローマ法の理解をもって補完するためであった。この頃のフランスではすでに10年以上カトリックとプロテスタントの間で宗教戦争が繰り返されており、サンバルテルミの虐殺が起きて間もない頃であった。ベイコンが身を置くことになる環境は宗教・政治的に緊張をはらんだものであった。それというのも彼が同行した大使のアミアス・ボレーは、カトリックの国フランスにおいて明確にプロテスタントであると表明している人物であったからだ。ボレーは、出身地であるジャージー島で多くのユグノー難民を受け入れ、フランスからの攻撃に備えて島を防備し、ユグノーの牧師たちを優遇していた。フランスに大使として渡ってからは宮廷内の特別室に迎えられ、大使としての公務を果たしていたが、同時に午後や夕方はフィリップ・ド・プレシス＝モルネー(Philippe Du Plessis-Mornay, 1549-1623)などのユグノーのリーダーたちと面会し、ユグノーの絆を強化していた<sup>(23)</sup>。当時のエリザベス女王としては、カトリックのフランスと同盟を結ぶという政治的な思惑がある一方で、ユグノーたちを励まし、国境を超えたプロテスタンティズムを支持していたため、ボレーのように公にプロテスタンティズムを支持する大使はフランスにおいて微妙なバランスをとらなければならなかった。

当時のフランスは戦々恐々としていた。1562年にギース公によるユグノー虐殺事件が起き、いわゆる宗教戦争(ユグノー戦争)が始まる。一度和平が成立したが1567年にまた破綻し、戦争が始まる。1570年に和議が成立するものの、1572年にはサンバルテルミの大虐殺が起きる。それはカトリックとプロテスタントの融和を図るためになされたナバラ王子(後のアンリ4世)とカトリック王シャルル9世の妹の結婚式の直後のことだった。これを機に再び戦争が始まる。ベイコンがフランスに渡った1576年は、再び両者の間に和議が成立し、カトリックに改宗させられていたナバラ王子がプロテスタントに再改宗し、ユグノー陣営の盟主となっていた年である。しかし、この和平

も長くは続かず、両者の間の緊張は続いていた。このような不安定な情勢の中、明らかにユグノーを支援するイングランドからの大使のお付きとしてベーコンはフランスに滞在していたのである。

フランスに滞在する間、ベーコンはボレーの大使としての仕事—主に手紙のコピーや清書—を手伝いながら、経済的な理由から今でいえばコンサルタントのような仕事にも手を出していた。それは友人にフランスについての情報を提供するというものだった。相手はのちにオックスフォード大学のボドレアン図書館を創設したトマス・ボドレー(Thomas Bodley, 1545-1613)である。彼は豊かな人文教育を受け、メアリ 1 世の時代にジュネーブに亡命し、カルヴァンのジュネーブ・アカデミーで学んだプロテスタントの先輩であった。この博学の先輩はベーコンに 30 シリングを送り、「君の友人らが期待するもの」を記し、フランスに滞在するベーコンが遭遇する事柄を細かに報告するように求めた<sup>(24)</sup>。この文書にどれだけベーコンが感化されたかについては、推しはかることしかできないが、外国に身を置くあいだに己を見つめ、己の領分たるものを定義するのに十分な影響があったのではないと思われる。ボドレーは以下のようにベーコンに見返りを要求した。

友よ、私は君の話を正そうなどとはしないし、君のお金や時間についても細かな事は言わないが、しかし君への友愛の心から、僕や君の友人を満足させて欲しい。君が旅行中にどのような実りがあり、それによって君がどのように良くなったのか。神あるいは世界の知識において。なぜなら、君が外国で過ごした日々は、自分を確立させ、自らの見解をもち、そして常にそれを頼りに人生を形作るのに充分なのだ。もっとも、出発する前よりも宗教的になって戻ってくる者は少ないというのはよくあることだ。そのような中で君への希望そして要望は、自らの基盤を固めることを己の主たる関心事とし、他国の悪いことや迷信的なことについて知るのではなく、真実にしっかりと己の心を従事させるようにすることだ。<sup>(25)</sup>

ボドレーからの要求には当時の宗教戦争に関するものが含まれていた。フランスは「二つの専門(信仰)を持った国」であるため、それらを分析するスキルを学ぶべきだとボドレーは要求する。

それぞれの規範、力点、経過について、どのような評判があり、内部でどのように捉えられているか、そしてどのように両者が国によって指示され、バランスを保ち、運営されているかを解説できないようであるなら、君は未熟者とみなされるだろう。どのような相違点があり、どちらが主勢となる傾向にあるのか、その攻勢や弱点はどこにあるのか。<sup>(26)</sup>

こうした知識をベーコンは二つの視点から集めるよう求められた。一つは「イギリス人(Englishman)として」、「隣国の人々に囲まれた中で、自らの国がどのような関心をもつか」を考慮しながら。またもう一つは「キリスト教徒として」、教会の美しさと汚点、希望と危険について考えるためであった<sup>(27)</sup>。ベーコンがこうしたボドレーの要望にどのように応えたかを示す手紙は、残念ながら残っていない。しかし、『随筆集(Essays)』に収められた「宗教の統一について」や「無神論について」には、当時の宗教戦争を観察して得られた彼なりの見解がしっかりと記されている。

#### 4. 宗教と自然探求の関係

「宗教の統一について」という作品の中でベイコンは、当時の宗教戦争について具体的に触れ、宗教そのものが秘める恐ろしさについてこう述べている。

詩人ルクレティウスは、自分の娘を神の犠牲にささげたアガメムノンの行為を見たとき、次のように叫んだ——宗教は人をこんな悪事に向けることができた。フランスの大虐殺やイギリスの火薬陰謀のことを知ったら、[ルクレティウスは] 何と言ったことだろうか。実際よりも7倍も快樂主義者で無神論者になったことであろう。(28)

ここで述べられているのは、フランスの「宗教(ユグノー)戦争」によって繰り返された多くの人々の虐殺である。ルクレティウスの言葉に表現されているように、ベイコンは「宗教」が実際に悪事に人を向かわせ、人殺しまで引き起こしてしまうものであると考えていた。

ルクレティウス(99BC-55BC)は『事物の本性について (*De Rerum Natura*)』の中で原子論を展開してゆくに際し、いかに宗教が悪事に人を向かわせてきたかを印象づけ、原子論を受容することに罪悪感を感じたり、神に不敬になりはしまいかと心配すべきではないと論じている。そこで引き合いに出されているのが、父アガメムノンによって生贄に出された娘イーピゲネイアの話である。アガメムノンはトロイア戦争の前に狩りをしていて、次々に獲物を捕らえることができたので、調子にのって「私の狩りの腕前にはアルテミスであってもかなわないであろう」と言ってしまう。それに憤怒したアルテミスは逆風を吹かせアガメムノンの兵団が出征できないようにしてしまった。神託を問うと娘を生贄に捧げよとのことであつたため、彼は偽の縁談を持ち出して娘を連れ出し、娘は婚礼の衣装を着たまま祭壇で命を落とすという残酷な話だ。ルクレティウスは「かの宗教なるものの方こそ、これまではるかに多くの罪深い、不敬神の行いを犯してきているではないか」と述べ、人間の「精神の恐怖と暗黒は(中略)太陽の光明や、真昼の光線では一掃できないことは定かであり、自然の姿(を究明すること)こそ、また自然の法則こそ、これを取り除いてくれるに違いない」としている(29)。

ベイコンも同じように、宗教に対しては新たな展開を期待せず、宗教的な関心が自然探求における進歩を阻んできた歴史について語る。

自然哲学があらゆる時代を通じて、危険で厄介な反論者、言うまでもなく迷信および盲目的で過度な宗教的熱狂に出会ってきたことも看過されてはならない。なぜならばギリシャ人は雷や嵐に自然的原因を初めて提示したが、そうしたものに慣れていない聴衆に神々を侮辱しているとして糾弾された。(中略)のみならず、自然に関する議論は、スコラ神学者の集成や方法によって、より困難でより危険を伴うものになった。(30)

ベイコンは自然探求における前進を阻む勢力として「ある神学者たち」を挙げ、「彼らの無知」によって、自然探求が暴かれてはいけない神の神秘であるかのように誤解されてしまったことを嘆く。他にも宗教的関心は自然探求の障害であるという認識の有り様をベイコンは以下のように描写する。



ある人は哲学における動きや変化が宗教に侵入し、侵食するのではと恐れる。またある人は、自然の探求において（ことに無識者のあいだに）宗教を覆し、もしくは少なくとも揺り動かすような何かが見出されるかもしれないということが気がかりのようである。あたかも人々は心の奥深くかつ人知れぬ思惟の中で、宗教の力と感覚における信仰について疑問や不確かさを持ち、それがゆえに自然的なものに関する真理の探究によって何かしら危険が降りかかると恐れたようである。<sup>(31)</sup>

しかし、ベーコンの考えによれば、自然探求は宗教を立て直す力を備えており、自然哲学は「神の言葉に次いで、迷信の最も確かな療法」であり、「信仰を養うものとして最も高く推奨される」<sup>(32)</sup>。言い換えれば、自然哲学が成熟すれば宗教も自ずと確立されてゆくという相関的な関係に両者はあるのだ。そのため、宗教をめぐる状況が「宗教改革」により非常に不安定になっていた当時、宗教を支えるはずの自然哲学が育っていないのは当然のことであった。

人々の心に多大な影響力を持つ宗教が、ある人々の無知と向こうみずな熱狂によって連れ去られ、対立させられてしまったのだから、自然哲学の成長が停滞しているのも大して不思議ではない。<sup>(33)</sup>

ベーコンが観察するように、当時のキリスト教はある種の熱狂と党派的な争いによって分断されていた。当時カトリックとプロテスタント、および国教会と清教徒の間で認められていた抗争を俯瞰して、ベーコンは〈一つであるべきキリスト教会の分断〉を憂っていた。遡れば、これらキリスト教における危機は、いわば「宗教改革」運動によって引き起こされたものである。キリスト教を教会の権力に委ねるのではなく、神のことばに実際に触れ、それを理解し、それを広く一般の人々にも理解できるものにしようという動きが「宗教改革」であったとするならば、16世紀後半に起きていたフランスの「宗教（ユグノー）戦争」やイングランドにおける清教徒の弾圧は、「改革」の名に相応しくない結果であった。そのためベーコンはキリスト教における「改革」については懐疑的であったと思われる。彼が見聞きした宗教改革の実情は、「改革」の本来の意味からはかけ離れており、同じキリスト教徒たちが唾み合い対立して殺戮すら行うという酷いものであった。

そのような中でベーコンは、「神学」という領域に新たな可能性を見出していなかった。『学問の進歩』の最後でベーコンは神学に関する議論を展開させ、神学における問題は既に語りつくされていると示唆する。ベーコンは耕作の比喻を用いて、神学の領域には「あいたままでまだ種のまかれていないような場所や地面は見つからない」とし、人々は神学において「よき種をまくことに、あるいは毒麦をまくことに、せっせとはげんだ」と揶揄している<sup>(34)</sup>。神学の問題について語り続けることは争いのもとになるという認識のもと、ベーコンは神学とは別の分野において改革は成されるべきだという考えに至り、人間の知のあり方、とりわけ自然探求の分野に新たな改革の可能性を見出したのであった。

## 5. 改革の精神と近代的自己認識

ベーコンの思想に見受けられる改革の精神は、宗教の分野ではなく自然探求に発露を見出すこと

になったが、そもそも彼がこのように改革や革新を求める精神性はどのように醸成されたのだろうか。まず一つには、本稿の 2 において論じたように、彼の生まれや受容した豊かな人文教育が彼を「改革」へと向かわせたと言えるだろう。しかしながら、ベイコンの改革の精神は宗教改革後の世界を生きた彼の近代的な自己認識と不可分であり、それらは 3 で述べた宗教改革の影響なしには語れない。キリスト教の真意をめぐる戦いが繰り返された世界は、そのような戦いのなかった時代との違いを鮮明にし、新しい秩序の世界に生きているという「近代的」自己認識を誘発させたと考えられる。

ベイコンの両親は異なる形ではあるが宗教改革に携わった人々であった。父ニコラスはヘンリー 8 世に仕え、「宗教改革」によっていわば政治的に修道会から没収された恩賜の土地に自らの家族が住む家を建てた。これがフランシス・ベイコンが育ったハートフォードシャー、セントオルバンヌにあるゴランベリー館である。そして母アンに至っては、先述のとおり大陸のプロテスタンティズムを理想とし、国教会という国家権力と表裏一体の教会がその力を増していた時も、それに屈することなく理想のキリスト教を実現させようとはたらきかけていた。

その一方で、ベイコン自身は両親が携わった宗教改革の惨状を見て、更なる改革が求められるのは宗教や神学分野ではないと結論づけた。求められるのは、未だに謎や秘宝が多く眠ると考えられていた「自然」の探求であり、この自然探求の方法こそ、新たな「近代的」方法によって改善されるべきだとベイコンは考えた。それは本稿の冒頭、1 において触れた人間の知能による事物の認識の仕方の改善であり、これによって新たな実りが人類にもたらされると考えた。ベイコンは今後為されねばならない事柄の枠組みを提示し、実際の活動に関しては後世の人々に委ねることによって、過ぎ去るべき時代との決別を表明し、「近代」という未来への展望を印象付けた。

ベイコンの改革の精神に寄与したもう一つの要因は、大陸との接触によって得られたプロテスタントとしてのアイデンティティの自覚であろう。本稿の 3 にて述べたとおり、ベイコンは駐仏大使に同行してフランスへと渡り、プロテスタンティズムの名のもとで結ばれていたイングランドとフランスのユグノーたち（プロテスタント）の政治的同盟と関わりをもつことになった。彼はフランスに滞在中、イタリア旅行を計画するが、同行していた大使に阻止されてしまう。それは、イングランドのプロテスタントの家系として知られていたベイコン家の青年がカトリック国であるイタリアを旅することが危険だと判断されてしまったからである。ベイコンが訪れたいと考えていたパドヴァに教皇の力が及ぶことはないが、ベニスの領地では異端審問が行われており、トラブルに巻き込まれてしまう可能性があるかと憂慮された<sup>(35)</sup>。このような体験からベイコンは、プロテスタントであることが未だに命に関わる問題であり、「宗教改革」たるものによってもたらされた新たな世界が決して安定したものではないと身をもって知ることになる。

ベイコンの大陸との接触は、フランスから帰国した後も続いた。1580 年代は大陸に滞在した兄アンソニーと書簡を通じて連絡を取りあい、それが英仏間の関係を維持する重大な政治的役割を担っていた。兄アンソニーは 1580 年にまずジュネーブに赴き、テオドール・ド・ベーズ(Théodore de Bèze, 1519-1605)の家に滞在し、ジュネーブ・アカデミーにてカルヴァン主義の教えを享受した。この時アンソニーが頼りにしたのは母アンのプロテスタントとしてのアイデンティティであり、母方のクック家がジュネーブに亡命していたという事実であった<sup>(36)</sup>。当時ジュネーブ教会の賛同者はヨーロッパ中に交流があり、神の言葉だけでなく書籍や物、または金銭を送るルートを提供し、ま

た安全に手紙を配送する仕組みも兼ね備えていた<sup>(37)</sup>。アンソニーは、この改革派による広範なコミュニティを頼りにし、大陸での生活を送っていた。彼は 1581 年にフランスへと移り、その後、ボルドー、ベアルン、モンタルバン等に拠点を移しつつ、フランスに滞在する。そこから彼は、当時のイングランド政府が政策や外交を考える上で必要となる大陸の情報を提供していた。はじめはエリザベス宮廷からの依頼に応える形で、パリ在住のイギリス人プロテスタントのリストを提供したり、また大陸の国々の情勢を伝えていたが、次第に英仏間の外交の要ともいべき役割を果たすようになる。アンソニーはナバラ宮廷と密にしており、ユグノー陣営の盟主であったナバラ王子（後のアンリ 4 世）の手紙を弟フランシスへ送っていた。フランシスはそれをエリザベス宮廷へと届けることにより、ナバラ宮廷とエリザベス宮廷の非公式の対話の手助けをしていたのだ<sup>(38)</sup>。宗教改革後に激化したカトリックとプロテスタントの争いは、アンリ 4 世が 1598 年に発令したナントの勅令によってようやく収束するが、それまでの数年間、危機的な現実と向きあわずにはいられなかった。プロテスタンティズムに限られた都市でしか許されなかった時代にアンソニーはフランスに滞在していたため、彼の身は常に危険に晒され、1585 年にプロテスタント信仰が禁じられると、不当に検挙され、手紙や金銭のやり取りもできなくなり、音信不通になってしまう時期が続いた<sup>(39)</sup>。このような中で弟フランシスや母アンはアンソニーの身を常に案じていた。

このような経験は、まさにフランスの 16 世紀後半、「宗教（ユグノー）戦争」真っ只中という時代でなくては想定できない内容であろう。フランシスや兄アンソニーに降りかかる可能性のあった命の危険は、彼らの「プロテスタント」というアイデンティティを明確に認識する機会となった。また同時に宗教改革以前の時代との決別をより鮮明にし、新たな時代（近代）に生きているという自己認識を醸成させたのではないかと思われる。彼らが生きていた時代は未だに「プロテスタント」であることに身の危険がつきまとう時代であり、プロテスタントであるがために自己防衛をしなくてはならない時代であった。そのような時代を背景としたプロテスタントとしての自己認識は、過ぎ去るべきものとの決別を明確にし、新たな理念に基づいた世界を築き上げようとする改革の精神を醸成させたのではないだろうか。現状への不満をあらわにして抗議（プロテスト）し、本来的にあるべきキリスト教の姿を希求する精神がプロテスタント的な精神だとすると、ベイコンのように、知的領域における現状を批判し、より良くするための策を講じ、新たなあり方を提示するという行いは、近代的なプロテスタントの改革の精神の発揚であると解釈できるだろう。

## 6. プロテスタントの精神と宗教改革の原動力

この〈プロテスタントの改革の精神〉がいかなるものであったか、16 世紀イングランドにおけるプロテスタントを例に少し考察を加えたい。フランシス・ベイコンの母アンのように、国教会という制度によっていわば強制的あるいは自動的に「プロテスタント」となる以前から自らを「プロテスタント」と位置づけていた人々はどのような人々であったのだろうか。彼らをプロテスタンティズムへと向かわせた動機は政治的あるいは経済的というよりも、知的な性質のものであったと言えるだろう。

彼らは真なるキリスト教を求めらる中で、宗教改革がなされた大陸へと目を向けていた。彼らはカトリック王メアリ 1 世が即位するとジュネーブなどの大陸の拠点に亡命する。中でもギリシャ語やヘブライ語に精通した者たちが、真なるキリスト教を聖書のテキストに求め、新たに〈ジュネーブ

聖書)を編纂する。この出版のためには当然高い語学力と人文主義教育の素養が求められた。最初にジュネーブで印刷されたジュネーブ聖書は、エリザベス一世が即位すると先述のトマス・ボドレーの父親が独占印刷権を取得し、エリザベス一世の時代に70版出版された。ジュネーブ聖書は初めてひげ文字のゴシック体ではなくローマ活字体を用いた聖書で、同時に初めて家庭で常用されるようになった聖書である。多くの欄外注釈がついていたが、これを抜き取った聖書が現在も汎用されている欽定版聖書である。ジュネーブ聖書の性質、および大陸に亡命していた人々(Marian Exiles)のおおよそ4割が聖職者や神学を学ぶ学生であったこと、また3割強がジェントリークラスの人々であり、大方の人々がイングランドに帰国していることから推測されるように、彼らは生活のために移住したのではなく、本当のキリスト教を求める知的関心に突き動かされていた人々であった<sup>(40)</sup>。

我々は「宗教改革」が引き起こされた理由を、聖職者たちの悪行とそれに対する批判に還元してしまいがちであるが、本来のキリスト教の心を理解しようとする内的欲求が「宗教改革」を導く主な原因となっていたということを忘れてはいないだろうか。大陸のドイツ、フランスを中心に生まれたプロテスタンティズムは15世紀に始まった内的観想を重視するデヴォーティオ・モデルナの影響を受けたものである。ジャン・ドリュモーによれば、宗教改革は教えを供給する側の能力と需要側の新しい熱狂ぶりとの間の深いギャップから生まれた。説教の改善などの努力がなされても、15世紀の信徒たちの需要には答えられていなかったという。その証拠にルターは聖職者による悪事にも勝る最も有毒な悪として、「《真理の言葉》が改竄されていることについての組織的沈黙」を挙げ、「この悪と病は物質的なものではないので、人はそのことに気づいてさえおらず、そのことで動揺しなければ恐怖さえ感じていない」と嘆いている<sup>(41)</sup>。形骸化してしまった教会の慣習を超え、キリストの本来の教えを理解したいという知的な欲求は、宗教改革を引き起こす原動力になっていたのだ。真なるキリスト教がいかなるものであるかを求めた人々は、その知的欲求に突き動かされ、理想を求めて古き慣例や風習を棄却し、新たな秩序—新たな教会や生活—を求めて活動した。エリザベス一世の時代に国教会と対立した改革派(清教徒)の人々の中には、後にビルグリム・ファーザーズとしてアメリカへと逃れて行く者がいた。彼らは領主の宗教に従うことが道義であった時代に、己の信仰を守るために国外へ逃れて行った。彼らもまた古き秩序と決別し、新たな理念と生活を築くために行動を起こしたという点に於いてまさに近代人であり、近代的な歴史的自己認識をもたざるを得なかったのではないかと思われる。

## 7. 結び

ベイコンのように声高に改革を求める近代人の精神性は、上記のように真実を求めて宗教改革を行った人々の精神性や行いに照らし合わせてこそ理解できるのではないだろうか。宗教戦争が繰り広げられていた16世紀後半にプロテスタントとして生まれた者は、時代の先端においてどのように自らの身を守り、処するか考えねばならなかった。そして、親の世代によって「改革」の名のもとで行われてきたことを省みて、自分が生きている時代に何がなされるべきか考えねばならなかった。ベイコンは宗教改革後の「宗教(ユグノー)戦争」の時代を生き、プロテスタントであることによって降りかかる危険を自覚して、自らのプロテスタントとしてのアイデンティティを自覚することにはなった。しかし、プロテスタントであることに固執し、教会に更なる改革を求めると、国教会と清教徒の争いに加わることに繋がることと了解していたし、ベイコンの関心はより現世的で実質

的な事柄—自然の探求や人間の知能の使われ方等—に向けられていたため、それに固執することはなかった。ベーコンはむしろキリスト教における宗派間の争いは非生産的で、キリスト教本来の教えに反するものであると考えた。そのため彼は宗教間の違いを乗り越え、争いをやめ、平和的手段によって人類が本当になすべきことを考えた。それは争いのもととなるキリスト教神学における何かしらの改善ではなく、当時未だに組織的に為されたことがなかった人間の知的領域における改革、とりわけ自然探求の仕方の改善であった。彼は宗教改革の影響を受けたために宗教的問題にあえて介入していこうとはしなかったが、それによって何かしら人類のために新たに切り開いていかねばならないという近代的な精神性を培い、宗教とは異なる知の領域において「大革新」がなされなければならないと考えた。それが自然探求に関する方法の革新であった。彼の改革のビジョンは人間を惨めな状態から救い出すことを目的として、具体的には人間の知的能力を有効活用し、自然探求の営為を忠実に記録するように促し、情報を共有する協体制の形成を促した。

彼の描いた夢は次第に改革というよりも進歩のビジョンとなり、人類の漸次的な進化を想像させるに至った。ベーコンの思想が啓蒙主義の思想家たちに非常に評判が良かったのはこのためである。ベーコンの思想に色濃く表れている改革の精神は、16世紀後半という時代を生きた経験と彼自身の内的欲求から形成されたものであり、彼の出自や宗教戦争が繰り返されていた世界との接触、あるいは宗教改革に対する内省なしには語れないであろう。

## 註

- (1) Charles Whitney, *Francis Bacon and Modernity* (New Haven, Yale University Press, 1986), p. 8.
- (2) Whitney, p. 9.
- (3) Whitney, p. 15.
- (4) Lisa Jardine, Alan Stewart, *Hostage to Fortune: The Troubled Life of Francis Bacon* (London, Victor Gollancz, 1998).
- (5) *The Works of Francis Bacon*, eds. by James Spedding, Robert Leslie Ellis and Douglas Denon Heath (London, Longman, 1857).
- (6) Daphne Du Maurier, *The Winding Stair: Francis Bacon, His Rise and Fall* (London, Victor Gollancz, 1976) および *Golden Lads: A Study of Anthony Bacon, Francis and Their Friends* (London, Victor Gollancz, 1975) 等。
- (7) *The Oxford Francis Bacon XI: The Instauration magna PartII: Novum organum and Associated Texts*, eds. by Graham Rees and Maria Wakely (Oxford, Clarendon Press, 2004), pp. 2-3 (以降 *IM* の略称を用いる)。
- (8) *IM*, pp. 2-3.
- (9) *IM*, pp. 24-25.
- (10) *IM*, pp. 24-25.
- (11) *IM*, pp. 4-5.
- (12) *The Works of Francis Bacon*, eds. by J. Spedding, R. L. Ellis, D. D. Heath (London, Longman,

- 1897), vol.8, pp. 108-109.
- (13) Jardine, p. 24.
- (14) Jardine, p. 36.
- (15) Jardine, p. 70.
- (16) Jardine, p. 25.
- (17) Jardine, p. 31.
- (18) 彼らは歴史学上メアリの時代に亡命した人々として, **Marian Exiles** と呼ばれている。
- (19) ジュウェルの原著 *Apologia Ecclesiae Anglicanae* (1562) にもとづき, 1564 年 Reginald Wolfe により出版された。校訂版の编者によると, アンによるテキストは別の訳者によるものとして既に 1600 年に他の出版社から出され, 1635 年にはアンの翻訳が彼女の名前が伏されたまま出版されており, 約 200 年の間忘れられていたが, 19 世紀の中頃ようやく復活する。Lady Anne Bacon, *An Apology or Answer in Defence of the Church of England*, ed. by Patricia Demers, MHRA Tudor & Stuart Translations Volume 22 (Cambridge, The Modern Humanities Research Association, 2016). ジュウェルはオックスフォードで教育を受け, 1547 年にピエトロ・ヴェルミニ(Pietro Martire Vermigli)の弟子となり, 1552 年に司祭となる。大学の説教師ともなるが, 1553 年にメアリ 1 世が王位に就くとロンドンへ逃れ, その後 1555 年にフランクフルトへ辿り着く。ストラズブルにてヴェルミニと合流し, チューリッヒへと共に逃れていった。エリザベス女王が即位するとイングランドへ帰国し, エリザベス朝の改革に熱心に取り組むことになる。1559 年にはロンドンのセント・ポール寺院の説教師として選ばれ, 同時にソルスベリーの大主教にも選ばれる。彼はこのセント・ポール寺院での説教の中で, ローマカトリック教が聖書や教父たちの教えに即しているか疑義を唱える。この内容が主に *Apology in Defence of the Church of England* に収められることになる。彼は国教会の中心人物の一人となってゆくが, 当初は清教徒と同じ理念を掲げていた。
- (20) 非国教徒を保護する運動はフランシス・バイコン自身も, 非国教徒への弾圧を緩めるための議案を議会に提出することにより, 参加している。
- (21) Jardine, p. 32.
- (22) Jardine, p. 79.
- (23) Jardine, pp. 41-44.
- (24) Jardine, p. 48.
- (25) *Reliquiae Bodleianae: or some Genuine Remains of Sir Thomas Bodley* (London, John Hartley, 1703), pp. 364-365.
- (26) *Reliquiae Bodleianae: or some Genuine Remains of Sir Thomas Bodley* (London, John Hartley, 1703), p. 365.
- (27) *Reliquiae Bodleianae: or some Genuine Remains of Sir Thomas Bodley* (London, John Hartley, 1703), pp. 365-366.
- (28) *The Oxford Francis Bacon XV: The Essayes or Counsels, Civill and Morall*, ed. by Michael Kiernan (Oxford, Oxford University Press, 1999), pp. 14-15. “Lucretius the Poet, when he beheld the Act of Agamemnon, that could endure the Sacrificing of his owne Daughter,

exclaimed; Tantum Relligio potuit suadere malorum. What would he have said, if he had knowne of the Massacre in France, or the Powder Treason of England? He would have beene, Seven times more Epicure and Atheist, then he was.”

- (29) ルクレティウス著（樋口勝彦訳）『物の本質について』岩波書店，1961年，13 - 17頁。
- (30) *The Oxford Francis Bacon XI: The Instauration magna Part II: Novum organum and Associated Texts*, eds. by Graham Rees and Maria Wakely (Oxford, Clarendon Press, 2004), pp. 142-145 (以降 *NO* の略称を用いる)。
- (31) *NO*, pp. 144-145.
- (32) *NO*, pp. 144-145.
- (33) *NO*, pp. 146-147.
- (34) *The Oxford Francis Bacon IV: The Advancement of Learning*, ed. by Michael Kiernan (Oxford, Oxford University Press, 2000), p. 192.
- (35) Jardine, p. 63.
- (36) アンソニーはド・ペーズに *Penitential Psalms* のフランス語版を母アンに捧げるように依頼した。ド・ペーズはアン・ベーコンの近親関係や彼女の父アンソニー・クックがジュネーブに亡命したこと等をこの書に記した。ベーコン家とジュネーブの改革派の要人との繋がり深い。ジュネーブの神学教授ランベール・ダヌーはフランシスと兄アンソニーの異母兄であるエドワードに『アウグスティヌス注解』という二巻本(1578)を捧げている。
- (37) Jardine, p. 84.
- (38) Jardine, pp. 100-101.
- (39) Jardine, pp. 106-107.
- (40) Frederick A. Norwood, “The Marian Exiles: Denizens or Sojourners?” in *Church History*, vol. 13 No. 2, 1944, p. 102.
- (41) ジャン・ドリュモエ著（桐村泰次訳）『ルネサンス文明』論創社，2012年，175頁。